

2009年10月4日(日)13:30~17:00

## 第6回「家庭科の保育と保育士養成の保育をつなぐシンポジウム」

少子化対策急がば回れ！ 家庭科と保育実践の結合が鍵

# 乳幼児と中高生の「ふれあい体験学習」の大きな意義と実践 どうしたらふみだせるのか，理論からノウハウまで

報告 金田 利子

### <はじめに>

この企画は、2004年度から年に一度、後に述べるような課題意識のもとに始められ、本年度で6年目になる。

今回は、出演者を除いて一般参加者が30名であった。今回は、本学の教職関係の専門科目「家庭」の受講生は、他の授業の補講と、3クラスの中2クラスが重なったため、授業としての参加が不可能であったため、「家庭」受講生からは、約10名余が参加し、登壇者や企画者を含めて、総勢約50名の参加であった。

一般参加者30名の内訳は保育園保育士が11名、高等学校教員が3名、中学校教員が1名、大学・短期大学の教員が4名、他県の大学生が2名、本学の研究員・大学院生・4年生が各1名計3名、子育て広場やNPO関連が2名、所属不明の方が4名であった。

参加人数は例年よりも少なかったが、保育園からと中高から、そしてNPO等からの参加があった。中高の家庭科教員と保育園側、家庭科と保育者の養成に当たる大学教員、そして地域の方というように関係者の参加が得られたことは、企画趣旨の遂行にとって幸いであった。幼稚園からの参加がなかったことは残念な結果であった。また、今後は就学前と中・高だけでなくその間のある小学校の関係者からも参加を呼び掛けていく必要が感じられた。

また、今年は、「幼児と中高生とのふれあい体験学習の効果」について、共同研究を進めてきていた、研究グループ(信州大学の岡野雅子を代表とし、千葉大学の伊藤葉子、学芸大学の倉持清美、及び、本シンポジウムの企画者の本学所属の金田利子の4人)が、『家庭科の幼児とのふれ合い体験学習ガイドブック』を刊行し、それを活かした話し合いであったこと、家庭科のみならず幼児にとっての意義を園側から積極的に研究してきた園からの報告もされたこと、また中学でも中学校の授業参観に中学生がふれあった幼児の保護者も参加し、保護者同士の繋がりにまで発展した実践が出されたことなど、これまでより一段発展した内容になることができた。

### <第6回の企画趣旨>

(企画趣旨のみ、外に向けて大勢に呼び掛ける形をとったため、ですます調とする)

次世代育成、今の親と未来の親が手をつなぐことの意義と「ふれ合い体験学習」

子ども世代と親世代は、人間の歴史の循環関係にあります。全ての子どもはやがて親世代になり、その中から「親」が生まれます。子ども世代の中でも中高生は、近い将来親の世代に入ります。そして未来の親は今の中高生たちの中から育ちます。

中高生たちは、家庭科で「保育」を学び、『育てられている時代に育てること』を学んでいます。

そのなかで、今の自分の位置を自覚すると共に将来親になってもならなくても、親の持っている「幼いものを慈しみ育てようとする親性」を自らの中に育てています。それを家庭科では親性準備性の教育と呼んでいます。

これは、すべての国民の児童育成への努力義務を謳った児童福祉法の第1条に込められているものと言えます。努力義務にどう応えればよいかその能力の育成に、公的に責任を持つ学校教育で取り上げている唯一の場が家庭科の保育教育だからです。

乳幼児もやがて親世代になりますが、今は心身共に親の手を最も必要としている時期です。育児を困難に思い不安を強く持っている親が増えてきています。そうした中で、今保育園・幼稚園には子どもの保育のみでなく、入園児の親・家族援助や地域の子育て支援についても専門家としての役割が求められてきています。そして、様々な課題をもつ親に、つい苦情が出てしまうくらい、どう関わっていいか、苦慮しています。

保育所・幼稚園は、親の援助も含めて広い意味での社会的保育の場です。これは、児童育成の責任は保護者と共に国及び地方公共団体にあるという児童福祉法第2条に呼応しています。保護者負担と共に国や地方自治体の責任（税金をそこに向けて）で営まれている社会的保育機関の代表的なものが保育所と幼稚園です。その実質を担っているのが、保育者たちです。その保育者を育成しているのが保育者養成機関です。

この二つの場がまさに、今と未来の日本の子育てに責任を持っていると言えます。経済的にのみ少子化の問題が論じられる風潮には問題を感じますが、人類の未来を発展させる子どもを持つことを忌み嫌う社会は、不健全そのものと言えます。しかし、政府も世論も上記の二つの場の結合には目を向けず、目先の対策ばかりになり、家庭科の縮小傾向が強まっています。

それぞれの場には政府も意図的に着眼しています。今日の資料・冊子（『家庭科の幼児とのふれあい体験学習ガイドブック』）に挙げております

ように、中学校・高等学校の家庭科学習指導要領には乳幼児とふれあうことを実施していくよう明記されています（『ガイドブック』p.21）。幼稚園教育要領・保育所保育指針では、生涯にわたる人格形成の基礎としての人間関係の経験が大切にされています（『ガイドブック』p.20,21）。にもかかわらず、二つの機関の結合については言及されていません。

それ故、今こそ、家庭科の必要性和保育者との、また保育者養成機関との手つなぎの必然性を、理論的・実践的根拠を持って、アピールすることが大切になってきています。それぞれがバラバラになっては実質的な力にはなっていきません。「少子化対策、急がば回れ」とチラシに書かせて頂いた意味はそこにあります。

実際将来親になることが予想されている青年たちに、子育ての厳しさも喜びも、ともに含めて「科学とロマン」を伝えていく家庭科の保育教育での「乳幼児とのふれ合い体験学習」に目を向けてみるのが重要です。中学・高校で保育をしっかり学んだ青年たちは、質の良い保育を見分ける力もついてきますので、その青年たちが親になったとき、保育者とともに子どもを育てる主体として力強い存在になります。そういう青年たちが親になったなら、保育者たちにとっては鬼に金棒、互いにパートナーとしてよりよい保育を創造していくことが可能になります。よく保育者が漏らす「親にどうかかわったらいいの？」という悩みなど不要になり、もっと積極的に、専門家としての力量を一層磨いて行くことこそが課題となっていくに違いありません。

#### < 今回のねらいと次第 >

今回のシンポジウムでは、こうした意義を持つ二つの保育の場の結合を実質的に試みてきた乳幼児と中・高生とのふれあい体験学習について取り上げることにした。

「ふれ合い体験学習」は、かなりすすめられてきているが、家庭科の時間削減の中で、なかなか

想うように実行できない中高もあり、受け入れてはいるものの、その意義が乳幼児の側に立ったとき、十分に見えてきていないという保育現場があることも事実である。

そこでここでは、二つの保育の結び手としての

「ふれ合い体験学習」の意義を実践を通して確かめ、さらに掘り下げ発展させていくための理論からノウハウまで、実質的に深めて行きたい。

以上のような視点から具体的には以下のような次第でシンポジウムを展開した。

.....  
基調提案：「子育て、今の親と未来の親が手をつなぐことの意義」

企画者 金田利子（白梅学園大学教授）

報告1 『家庭科の幼児とのふれあい体験学習 ガイドブック』

作成の意図と経過、そしてどのように役立てていくか

「ふれ合い体験学習に関する」研究グループ代表：岡野雅子（信州大学教授）

報告2 「現在・過去・未来の親が手をつなぎ地域に開く家庭科保育の授業」

金子京子（さいたま私立大谷場中学校教諭）

報告3 「保育所・幼稚園からの呼びかけによる『ふれ合い体験学習』の取り組み」

佐野洋子（出雲市立中央保育所・幼稚園長）

コメンテーター 小松崎春代〔東京都三多摩公立保育所連合会会長〕

討論会 コーディネーター 金田利子〔前出〕

.....  
< 報告の要点 >

報告1 ガイドブック作成の意図と経過

どう活かしていくか

中学校の家庭科学習指導要領には幼児とのふれあいが必須になっていること、高校でも子どもと適切に関わる力が要請されてきていること、幼稚園教育要領・保育所保育指針では、保護者や地域の子育て支援への内容を保育の内実として位置づけていること、そこには親性準備性の教育の必要性が明確になってきており、学校で系統的に学ぶことが必要になってきていること、

学校での様々なふれ合い体験学習（家庭科・職場体験学習、ボランティア活動）を紹介し、家庭科だけが全ての生徒が対象となっていること、ここに良き市民を育てる意義があること、またここに家庭科教員の苦労があること等について取り上げた。

「ふれあ合い体験学習」の意義として、親性準備性を身につけること、生徒はやがて大人になり多くは親になり、次世代の育成に責任を持つ。言

い換えれば、家庭科での幼児とのふれあいを通して学びは長いスパンでの「子育て支援」の一つといえる。

さらにガイドブックに実際に触れ、どう事前に関連を取り合い、それぞれの機関ではどう指導していくかについて具体的に提案した。また、中高生が園を訪れるだけでない様々なふれ合い体験学習（幼児を学校へ迎える、0歳から2歳の親と子を学校へ招く、支援センターなどに出かける）についての紹介もなされた

全体として、中高生の「ふれ合い体験学習」を通した親性準備性教育は長いスパンでの「子育て支援」の一つであるといえると位置づけた。

報告2 中学校技術・家庭科の保育授業を地域に開く可能性

家庭科の保育授業（幼稚園への体験学習の成果のまとめを行うような授業）を公開授業としてして行った。対象授業参観保護者は、家庭科の授業に参加している3年生の保護者だけでなく、子育てに不安を抱く保護者を対象に地元の幼稚園に

通う園児の保護者への公開を狙った。実際には中学生の親 11 人と幼児の親 30 人が参加した。公開した授業内容は「遊びの中で用いられる幼児同士の会話といざごさへの保育者の介入」を題材にした。

授業のねらいは「幼児の際から人との関わり方の発達を学ぶ」とした。詳しくは省略するが、特に中学校の教師自身が幼稚園で感動したことをとりあげた。

金子教諭は「中学校の教員はとかく喧嘩をしていれはすぐ止めると言う直接的な指導をしてきていたが、その幼稚園では子ども同士が相当の厳しい喧嘩をしていてもぎりぎりのところまでは教師は口を出さず、いよいよもうこの辺でというときには、リーダー的な子（年齢が違えば年上の子）にほんの一言ささやいただけで自体が一変しておさまっていった」幼稚園の保育に感動した。

（何を一言ささやいたかという、「（やられている方が）あなただったらどういうきもちがする？」とささやいたのだそうだ。）そういうことも授業の内容に入れた。

授業後中学生の親と、目下幼い子どもの子育て中の親の両方から感想を聞いた。

どちらの親も、もっと早い時期に学んでおきたい内容であった。子どもの目線に立つことの重要性を感じた。また授業後に家庭科教師を媒介に、中学生の親と、幼児の親の交流も持った。

こうした実践を基に、金子教諭は、「中学校家庭科『保育』の授業を地域に開き、学習する可能性が豊かにあると言える」と結んだ。また、今後の課題として地域に還元する「知」の内容と地域に開く「しくみ」の方法を挙げた。

### 報告 3 保育所・幼稚園からの呼びかけによる

#### 『ふれあい体験学習』の取り組み

「ふれあい体験学習」は、家庭科からの依頼で、引き受けるという場合がほとんどである。

最近、ようやくその効果についても中高生だけでなく、乳幼児にとってはどうなのかという視点にも注意が向けられるようになったばかりである。

そうした中で保育者・幼稚園の側から「中学生・高校生のみなさん！保育体験してみませんか。」と呼び掛けている園がある。他にもあるかもしれないがコーディネーターも参加している、「ふれあい体験学習」に関する共同研究グループの調べでは

今のところ、今回お願いした出雲市立中央保育所・幼稚園のみであった。

そこで、その取り組みについて話して頂いた。

詳細は省略するが、この呼びかけのねらいは人材育成における保育所・幼稚園からの発信だという。仕事においても子育てにおいても、コミュニケーション力がある。楽しいけれども忍耐力もいる。そうした力を地域の青年たちに付けてほしいと願っての取り組みであった。

しかし、その効果においては、両面から捉えており、幼児にとっても、きちんと押さえている。幼児にとっては一緒に遊ぶことを通して年上の比較的若い男女（お兄さん、お姉さん）にあこがれを持つ。抱っこやおんぶを通して親しみを持つ。一緒に遊ぶことを通して満足感を得る。難しいことを一緒にすることで成功体験を共有する。ダイナミックな遊びに刺激を得る等である。

まとめとしてあげられたことが内容を集約しているもので、それだけを記しておくことにする。

子育ては、愛情、忍耐、体力を必要とするが、人生において楽しい体験であること、自分を豊かにすることであることを保育所・幼稚園から発信していく。幼児が多様な体験ができるようなふれあいを工夫する。誰でも、自然に気軽に参加できるような雰囲気作りに努める。幼児に関わる生徒の姿は多様になってきた。私語が多かったり、幼児に興味、関心が希薄な生徒が見られるようになった。そうした生徒のように対応していけばよいか。中学校・高校と連携を深め、共に支えていくことが今後の課題である。

### < コメンテーターからのコメントの要約 >

保育園の現役時代に印象に残っている事例を挙

げつつ、保育所・幼稚園から高校まで、地域における公的機関が拠点になって、連携しつつ地域で「0歳から青年期までを見通して保育・教育しよう」「みんな（地域）で、みんなの子（地域の子）を育てよう」（括弧内金田）ということが語られた。要約すると、以下のようなことがコメントとして話された。

家庭科はみんなが来る良さがあるが、時間が極めて短い。したがって、家庭科の授業を契機に自分の意志で自分の都合のつく時間を使って、また園を訪れるとよい。園としては乳幼児から青年まで、みんなが気楽に立ち寄れる場となり、地域で、声を掛け合っていきたい。乳幼児はやがて少年になり青年になって大人になる。中・高生と乳幼児とが関わることにより、小さい頃の自分と重ね合わせ、今の自分そしてやがて自分を見とおしていく場にしていき、中、高などの他機関とも連携して地域で子育ての循環を支えていこう。この地域で親になってまた子どもを育てる人、他所から来てここを居場所として生きていく人、みな乳幼児から少年、青年そして大人・親へというように、その循環をいきている。保幼小中高ともにその機関の特徴を活かして支えていこう。中・高の家庭科等での「ふれ合い体験学習」もまた、その一環として保育所・幼稚園と連携していく大きな力になれるのではないかと考える。

#### <まとめ>

今回の実践報告は、中学家庭科の保育の授業を直接子育てに不安を持っているであろう乳幼児の親にも公開し、中学生の親と共に参加するという形で地域の子育てに乗り出した点で画期的な実践と、保育・幼稚園の側から中学・高校生に保育体験を呼び掛けるといふ、これまた、地域の人材育成の観点と、乳幼児教育を合わせた画期的な実践であり、その内容確認等に質問が集まった。

また、「ふれ合い体験学習のガイドブック」づくりの視点からの岡野報告の「家庭科での親性準備性教育は、長いスパンで見た子育て支援の一つ

という視点」に納得したという発言も印象に残った。

総じて、コーディネーターからの起用提案に立ち戻って捉えるとき、中高生のふれ合い体験学習は親・市民になる前の親性準備性の教育であり、それがやがて親世代を豊かにしていくと同時に乳幼児の保育・保育の質的向上につながることについて述べたが、長いスパンの子育て支援という岡野報告とも呼応していた。二つの報告はともに、中学校から乳幼児の親に、保育所・幼稚園から青年たちに、と言うように相互に働きかけあうもので、地域の子育て関係を豊かにしていこうという子育て支援になっている提案であった。また、0歳から青年期を見通した保育を地域みんなで形成していこうというコメントのコメントとも上記と良くかみ合っていたと思われる。

今後はこの循環関係への理解をもっと広めていくと共に、以下のような方向も探究していく必要があるのではないかと考えられる。それは、人は生まれたときから自らが育つとともに、他者と発展的に関わる関係的能力を形成していくという意味で、子育て支援にも関わっている。そういう意味で、中高生や他世代の人たちを保育所・幼稚園に園に迎えることの、言い換えれば園における世代間交流の意味を、幼児と中高生の変容などの実態を基に探究していくことではないと思われる。